

なぜ地理学が重要か—アメリカが直面する三つの課題： 気候変化，中国の台頭，世界的なテロ活動*

ハーム・ドゥ・ブリジ
内藤 嘉昭（訳）

はじめに

10年前に私は、地理学的視点からみた世界情勢に関する本を著したが、これはそれに先立つ7年間ABC放送で放映された「グッドモーニング・アメリカ」で、私の話が視聴者の間で好評だったことを受けたものである（de Blij, 1995）。ソ連崩壊やイラクのクウェート侵攻、湾岸戦争、ユーゴスラビアの分裂、環太平洋地域の経済的奇跡、「新世界秩序」に向け長足の進歩を遂げる世界などを、スクリーン上で地図を使って説明してきた。地球温暖化は緩慢で一時的なものであり、アフリカの衛生問題と経済危機は好転するかもしれず、ロシアは安定した民主化に向かい、テロ事件は数的にも重大さでも減少していくかもしれない、と当時はまだ望みがあった。

移り変わりの速さで、10年の間にこの世界は様変わりしてしまった。急激な気候変化は、地球上の秩序への実に深刻な脅威となった。中国の経済的台頭には、新たな冷戦を惹起する可能性を帯びた政治的影響力と軍勢力が常につきまとう。テロは激化し地球規模での暴動の様相を呈しつつある。ヨーロッパ統合は揺らぎつつある。ロシアの民主化は破綻に瀕しつつある。そして、アフリカの展望はこのグローバリゼーションの時代において、悪化するばかりで改善の兆しはない。

大英帝国は日の没することがないといわれた時代が終わり、それ以降今日まで、アメリカによる単一の超大国による地球規模での影響力の行使が

続いている。2004年11月の米大統領選は、現実的に世界の指導者を選ぶものでもあった、との外国人評論家の指摘があったが、それはあながち誇張ではなかった。アメリカ以外の国には選挙権がなかったものの、その結果に関心を寄せる十分な理由があった。世紀の変わり目において、アメリカの力は誰もが認める現実であったとはいえ、頻発する米本国と国外でのアメリカ人への攻撃には、手ぬるい対応しかみられなかった。アメリカの外国との関係は、一般的には依然良好といえる。新世紀に入って4年、アメリカは軍勢力により二つのイスラム国家を占領したが、アメリカ政府は他のイスラム国家も非イスラム国家も、その照準にしていることは間違いない。アメリカの優位は、ある意味でかつてないほど大きい。しかし、その諸外国との関係は史上まれにみる低さである。

自らの決定がアメリカ一国のみならず全世界にも及ぶ、その代表を選出する民主国家として、我々アメリカ人は実質的に縮小する小さな惑星について、よく知っておく義務がある。しかし、実際のところ、我々のもつ地理的知識は不適切で、少なくとも世界的事件にまで発展しなければ、地理的な関心はなかなか高まらない。1980年代初頭とイラク戦争勃発時との間に、毎年数分ごとに測定した国際ニュース報道は、3分の2にまで減少している。

本書の目的もそこにある。すなわち、そうした地理的知識を議論するということは国家安全保障の問題であり、我々の地理的知識が脆弱な現状で

は、おそらく次第に競争の激化する世界において、深刻で致命的な不利益をもたらすことになる。地理学的洞察は地政学的問題に対して必須であり、文化から経済にいたる様々な側面で意思決定を行う際にも必要である。地図をもっと使う必要があるし、図から相互作用へと地図製作法を一変させた新しい技術も有効に利用する必要がある。地球とは何かということについてより知見を広げるべきであり、そうすれば、ここ数年後の方向性と位置づけとの示唆が得られよう。

同僚の一人に何章か原稿を送付して、一読を願い意見を請うたところ、本書に何を期待するのかと尋ねられた。何よりも私は、複雑な世界を理解する一助として地理学の有効性と成長性を確認できることを願っている。地理学は予期しないものと関連づけできる、という傾向を有する。例えば、気候変化と歴史的出来事や、自然現象と政治的展開、環境と行動といったようなものは、他の分野では相互に関連性をもたない。また、地理学は現在地と現在とを、あるいは、知覚的に未来をも洞察する傾向にある。アメリカ人がもつ地理学の知識の希薄さと並んでみられるのは、過去に対するある種の文化的強迫観念である。歴史や考古学、あるいは、他の歴史にかかわる講義も取ることなく大学を卒業してしまうのは、信じがたいことである。さらに、我々のうち現代地理学を学んで卒業する者はほとんどおらず、あまりに少なすぎる。

私の抱くもう一つの希望は、地理学教師だろうと他の教師だろうと、教師が本書の中で学生と議論するテーマを見出して欲しいというものであり、両親も食卓を囲みながら家族と議論する問題点をここで見つけて欲しいというものである。一つ示唆するとすれば、本書を読む際には手許に世界地図をおいて欲しい。本書には地図が掲載されているが、それはあまり多くはない。それから、地球儀も役立つことだろう。どんな家庭でも地図なしでよいはずがない。地理学をさらに深く掘り下げようと思ったならば、参考文献中の文献には地図の専門家による200以上のテーマ別のカラー地図

が含まれている。その秀逸な作業は私の著作を長年下支えしてきたものである (de Blij and Muller, 2004)。

私の場合、人生の早い段階で将来的職業として地理学に出会えたのは幸いであった。さらに、その幸運は知り合いになれた同僚や、小さいながら活発な地理学者のコミュニティで、友人となった人たちと交流が生まれたことである。そして、その地理学者らは、実に驚くべき多様な専門的背景を有していた (それはワイン産業から海洋気象局、旅行産業から教育界、出版業界から政府まで様々であった)。こうした同僚や友人の多くは、専攻が関連分野であることもあったが、本書に色々な方法で貢献してくれた。私の関心を引くような研究成果や発想をもたらしてくれたこともあったし、内容の議論だったりもしたし、原稿を読んでくれたりしたこともあったし、予期せぬ洞察を導いてくれるような簡単なコメントである場合もあった。こうした援助の中には、引用というかたちで反映されることになったケースもある。ここでは次の方々に対して謝意を表しておきたい。ディック・アレン、バーバラ・ベイリー、リチャード・バンズ、ボブ・ベガム、フィル・ベントン、アラン・ベスト、ディック・ボエム、デイブ・キャンベル、イラフン・チルズ、スペンサー・クリスチャン、ロイ・コール、ボブ・クルーク、ウェイド・クーリエ、ジョージ・デムコ、ジョン・ドリンコ、ライアン・フライブ、スキップ・フレイシュマン、エリン・フバーグ、ゲイリー・フューラー、チャーリー・ギブソン、エド・グロード、ディック・グループ、ギル・、グローブナー、ジェイ・ハーマン、カール・ハーシュ、チップ・ホエラー、ジョン・ハンター、トム・ジェフズ、アート・ジョンソン、テッド・カンドル、グレイディ・ケリー・ポスト、ジム・キング、ピーター・クロッグ、ジョン・ラーセン、ニール・ラインバック、ドン・ラバス、ジョン・マリノウスキー、ジェフ・マーティン、パトリシア・マッカーリー、デイブ・マクファーランド、ポール・マクファーランド、ベティ・メガーズ、ヒュー・モウ

ルトン、ピーター・ミューラー、アレック・マーフィー、デビッド・マレイ、ジム・ニューマン、ダン・ニーメイヤー、ジャン・ニジュマン、ユージン・パルカ、チャーリー・ピートル、マック・ポーン、ジム・ポチェン、フランク・ポッター、ビクター・プレスコット、ダグ・リチャードソン、ジャック・レイリー、ディック・ロブ、クリス・ロジャーズ、ユーニス・ルートリッジ、スターティス・ザーケラリオス、バース・ザウアー、ジェフ・シャーファー、ルース・シヴァード、トマス・ソーウェル、ピーター・スピアーズ、マーク・スウォーツ、リッチ・シマンスキー、メアリ・スウィングル、デリック・ソーム、モリス・トーマス、ジョージ・バラノス、ジャック・ウェザーフォード、フランク・フィットモア、アントワネット・ウインクラープリンズ、デューク・ウィンターズ、そしてヘンリー・ライト。無論本書の内容に対する責任は私が一身に負うものであり、ここに引用したすべての、あるいは、一部の人たちの承認を受けたことを意味するものではない。

オックスフォード大学出版局で私の担当になってくれた編集者、ベン・キーンには特に感謝を申し上げたい。私に本書の執筆を勧めたのも彼であるし、その広範な関心は創造的なエネルギーとよくかみあっている。どの執筆者でも彼が担当ならば、幸運と考えるべきだろう。また、制作編集のキャサリン・ハンプシャーズによる優れた仕事や、原稿整理編集者のポーラ・クーパーによる助力、創造的なレイアウトを考えてくれたデザイナーのスーザン・デイと魅力的な装丁を施してくれたキャスリーン・リンチにも感謝をしたい。さらに、広報係のジョーダン・ブッチャー、第12章にあるアフリカに関する論考（de Blij, 2004）を加筆して掲載することを許可してくれた「ペンシルバニア・ジオグラファー」編集者のウィリアム・B・コーリーにも感謝したい。

黒白の地図にかかわる複雑な情報を表現することは、いつの場合も難しいものだが、ドン・ラーソン及び彼の率いるマジソン（ウィスコンシン）のマッピング・スペシャリストチームにも感謝し

たい。彼らは限られた地図製作法を最大限に活用して、すばらしい業績をあげてくれた。

特に、私の妻であるボニーには、励まし、間違いのない判断を下し、それに寛容でいてくれたことに感謝している。努力を実りあるものとしてくれた彼女の役割は、簡単な感謝で済むものではないが、それを記すことで私の感謝の印としたい。

ハーム・ドゥ・ブリジ

なぜ地理学が重要か

10年前には、それ以前の10年と比べれば、世界が到底それ以上早く変化しないだろうと思われていた。ソ連は新たに15の独立国家に解体され、中国の環太平洋岸は東アジアの経済地理学を一変させ、南アフリカはネルソン・マンデラの指導下で新たな道を模索するようになり（新しい政策として、行政地図を完全に塗り替えることを考えていた）、NAFTAはカナダとアメリカ、メキシコ間で北米の商業地図の書き換えを計画する経済団体と連携し、EC（European Community；欧州共同体）はEU（European Union；欧州連合）と名前を変えて、15カ国構成とするため新たに3カ国を加え、ユーゴスラビアは制御不能な大虐殺の真っ只中に崩落していた。世界の人文地理学上のあらゆるこうした変化は、地球規模での気候変化から地域環境での危機（その一例としては、1993年に発生したミシシッピ川とミズーリ川の「千年」洪水があるが、それは多くの劇的事件の一つにすぎない）にいたるまで、自然の変化と軌を一にしている。新しい用語が一般的に用いられるようになってきた。例えば、民族浄化、温室効果、湾岸戦争、エルニーニョなどである。

しかし、世紀の変わり目を越えたこの10年の変化の速度は、緩むことはなかった。国際的テロ組織の拡大は、いまだかつて想像だになかった方法でアメリカを襲うようになった。米軍はアフガニスタンで戦闘を始め、イラクを襲撃した。北朝鮮とその核への執着は、国際的関心事のトップとなった。ほとんど見過ごされているアフリカでの

戦争は、数百万人（そう、数百万人である）もの犠牲者を出しているし、エイズの蔓延はさらに数百人の命を奪っている。アメリカとカナダではNAFTAによって失業が発生した分、それはメキシコで雇用機会が創出されることになったが、今度は中国にそれが移り始めている。EUは拡大を続けているが、2004年5月に新たに10カ国を加え、他の待機中の国を合わせたヨーロッパ39カ国中25カ国を組み入れている（訳注：2007年1月1日現在EUは27カ国体制）。ユーゴスラビアという名前が地図上から消失するのと同時に、違う名前も登場している。例えば、東チモール、パプア、パダニア、トランスドニエストリア、リンボボ、ウッタランチャルなどである。さらに、共通に使われている新用語は、新しい時代を反映している。Pandemic（全国的〔世界的〕流行の）、jihad（ジハード：イスラム教徒の聖戦）、War on Terrorism（テロ戦争）、Sunni Triangle（スンニ・トライアングル：バグダッドと、フセイン元大統領の出身地の北部ティクリート、中部ラマディの3都市を結んだ三角地帯）。

このような変化に対して共通点が存在するのだろうか。我々の世界とその変容は、特定の視点から評価しうるのだろうか。本書では一つの確信をもってその両方の質問に答えるものである。すなわち、それは地理学である。

実際、地理学自体は近年いくつかの変容を遂げている。私が高校生だった頃、国や都市、山脈や河川の名前を覚えることは、もうしなくなっていた。数ある科学の中で地理学だけに特別な位置づけが与えられることは、もうなくなっていた。大学に行く頃、地理学は（少なくともヨーロッパとアメリカでは）より科学的になっており、数学的ですらあった。教師になってからさらに技術的になり、地理情報システムを意味する頭文字GIS（Geographic Information System）が今ではすっかり馴染みとなった。今日地理学には数多くの方向性があるが、この複雑な世界を理解するのに依然有益な手法を有している。

地理学者になるということ

アメリカで最大の地理学を専攻する人々の団体から出されたニュースレターの中に、著名な地理学者のインタビュー記事が掲載されており、先日これを読んだ。デラウェア大学で教鞭をとっているフレデリックE.（フリッツ）ネルソンに編集者が質問しているものだったが、それは我々地理学者がしばしば耳にする質問であった。つまり、なぜこの職業に就いたのかというものであった。彼の答えは他の多くの同僚と同じであった。学部学生の時（ノーザン・ミシガン大学）彼は地域地理学の講座を取り、それがとても気に入ったので、その専門課程に入ることにしたという。ミシガン州立大学で大学院生となった際に専門を変えたものの、地理学が本来彼を魅了した点を忘れたわけではなかった。今日彼の周氷河（氷河周辺）の現象に関する研究は、世界的な定評を得ている（Solis, 2004）。

私自身の地理学との出会いは、第二次世界大戦中オランダでの初体験に起因する。それは学校ではなく、家庭においてであった。ロッテルダム郊外の自宅の屋根の窓から、父と一緒に恐怖を抱きながら外を眺めていたが、ロッテルダムは1940年5月14日のナチによる空襲で炎に包まれていた（長い間埋もれていた感情が、2001年9月11日に再びよみがえったものである）。両親はすぐそこから脱出し、国の中心部に近い小さな村に避難した。そこで両親は生存のため日々苦闘を続けたが、私はそこにある図書館で大半の時間を過ごしていた。そこには世界地図や全国地図、大型の地球儀、それにヘンドリック・ウィレム・ヴァン・ルーンという名の地理学者の本があった。冬の寒さが厳しくなるにつれ、戦局は悪化していったものの、こうした本が私に希望を与えてくれた。ヴァン・ルーンは遠くの世界のことを描いており、そこは暖かく、空が青く、やしの葉がそよ風に揺らいでおり、食料は木からもぎ取ればよかった。そして、活火山や熱帯の嵐、遠く離れた島々への海の旅、大きく忙しい都市、強大な王国、それになじみの

ない風俗などが生き生きと描写されていた。私は世界地図でヴァン・ルーンの旅をたどり、いつか彼の描いた世界を自分で見ることを夢見ていた。ヴァン・ルーンの地理学は私に、文字通り活力を与えてくれたのである。

戦後、幸運はいくとおりもかたちを変えてやってきた。学校が再開されると地理を教えてくれた私の教師は、やる気を起こさせるような課題をいくつも出してきた。我々のような年のいかない児童があふれた教室では、戦争中に初等教育が中断されていた。戦後、地理学が我々の知の地平を切り広げる一方で、それが厳密な調査研究を要することも学んだ。彼がまさしく予言したように、その報酬は計り知れないものがあった。

したがって、地理学に関し熱意をもち続け、それがこの複雑で変化の激しい世界において人生をより豊かに意義あるものとしてくれる、という信念に基づき著述をするのは、そこに生涯を通じた発見と魅力があるからに他ならない。

地理学とは何か

地理学者としてこれまで私は歴史学や地質学、生物学といった分野の同僚をうらやましく思うことが多かった。その名称からも定義が明確であり、一般人にもはっきりとわかる専攻で仕事ができるのは、きっとすばらしいことだろう。もっとも、一般人の感覚はそれほど正確でないにせよ、歴史家や地質学者、生物学者が何をしているのかということについて、一般の人たちが知っているものと彼らは「思っている」。

我々地理学者はそうしたことには慣れている。飛行機やどこかの待合室で誰かの隣に座って話を始めれば、その人はこう尋ねるだろう。地理学だって、あなたは地理学者ですか。ところで、地理学とは一体どういうものなんですか。

実際のところ、我々地理学者は単一で明快な答えを持ち合わせていない。およそ2000年前に地理学は、基本的には発見とかかわるものであった。ギリシア人哲学者エラステネスは、飛躍的に地

理学の知識を向上させた。太陽の方角を測定することで、地球が丸いということを見出しただけでなく、状況から驚くほど正確な数値に近い値を算出している。数世紀後、地理学は探検と地図製作法によって進化を遂げる。それはドイツ人自然地理学者アレクサンダー・ヴォン・フンボルトが、探検と記念碑的業績を残した時代とほぼ同じである。数十年前、地理学は依然として寄せ集めの・記述的な分野であり、それを専攻する学生は実際の必要以上に岬や港湾の名前を知っていることが期待されていた。今日地理学は新しい技術の時代に入り、衛星からコンピューターに情報が送信されて地図がつくられ、それは様々な分析や意思決定に用いられている。

しかしながら、こうした新規開発にもかかわらず、地理学には長い伝統がある。第一に、多くのことがらのうちで最も重要なのは、地理学は人間界のみならず自然界もその対象としている点である。したがって、単なる「社会」科学ではない。地理学者は氷河による浸食作用や海岸線、砂丘、それに鍾乳洞、天気や気候についても確かに研究するが、動植物も扱うのである。我々はまた人間の行動も研究しており、それは都市計画から国境画定、ワイン醸造から教会参列者にまで及ぶ。私にとってもそれは地理学の最大の利点だと思う。このように広く、すばらしい我々の世界を、地理的に学べる分野は他にほとんど存在しない。

それゆえ、このことから地理学者は、人間社会と自然界との複雑な関係を説明するのに特に好都合な立場にある、といえよう。これは地理学のもつ第二の伝統である。この分野において知見は急速に拡大しており、地理学が貢献できるそうした証拠をみたいのであれば、ジーン・グローブ以上の魅力的な著作を知らない。それはヨーロッパと他の大部分の世界が、彼女の呼ぶ「小氷河期」、すなわち、西暦1300年頃から始まり、多少の緩みがありつつも1800年代初頭まで続いたとされる時代に、何が起きていたのかを分析したものである。これは地球規模の広範囲の分析である。他の地理学者の業績は規模において水準が異なる。私の同

僚のうち環境問題に対する人々の反応を研究、予言した人がいる。例えば、なぜ活火山の斜面や、氾濫しやすい河川にある氾濫原に住むことに人はこだわるのか。カリフォルニアの住宅購入者は、購入した宅地が地震の危険をはらむことをどの程度知っているのか、あるいは、購入前に不動産屋に何を知らされていたのか。別の環境関連問題としては、健康と病気とがある。多くの病気の発生源と拡散は、文化的伝統及び習慣はもとより、気候や動植物とも強い関連性がある。医療地理学を専攻する人々は、小規模ながら生産的な活動を展開しており、コレラからエイズ、鳥インフルエンザにいたるまで、悪疾の発生と拡散を研究、予報している。『緩やかな疾病』とピーター・グールドが呼ぶ、彼によるエイズの著作は、この種の分析をする際、地理学者の工具箱となることをよく示している (Gould, 1993)。

第三の地理学的伝統は、単純に次のようなものである。すなわち、外国文化と遠方の地域を調査し、理解しようとするものである。数十年前、外国に関し大なり小なり相応の経験のない地理学者をみかけるのは、まれであった。たいてい外国語を一カ国語以上話し（これは博士課程修了要件であった）、選択した地域の大衆紙も学術文献も調査しており、繰り返しそこで調査を実施していた。そうした伝統もインターネットや衛星データ、コンピューター地図製作という新時代に幾分薄らいだ観はある。しかし、多くの学生が依然何よりも地理学に魅せられるのは、外国への興味からである。もちろん、国際事情に関心が薄れるのは地理学に限ったことではない。ネットワーク・ニュースの内容分析から、アメリカの情報活動上における外国地域の専門にいたるまで、我々の孤立主義と偏狭さとは際立っている。しかし、おそらく要望というより必要性というかたちで、その反動が将来訪れるだろう。地理学的に偏狭では、深刻な国家安全保障上の危機を引き起こすだろう。

地理学者が自己規定を好む第四の伝統は、いわゆる立地の伝統であり、それは本質的に人文地理学（自然地理学ではなく）の伝統である。サラソ

タ、フロリダ、東京といった町や都市の映画産業やショッピング・センターの活動が、なぜそうした場所で展開されているのか。そのような立地がその繁栄と何か関係があるのか。ある都市が栄え、成長する一方で、近隣の開発地域は衰退し、失敗してしまうのか。しばしば地理学的回答が、歴史的事件を解明してくれる。都市計画や地域計画は、今日多くの大学における地理学のカリキュラム上重要な要素として組み入れられており、多くの卒業生が計画関連の分野において職をみつけている。

このように多くを語ってもなお我々は、地理学に対する簡潔な定義を依然持ち合わせていない。

世界を空間的にみつめる

総合的にいえば、地理学が第一にすべき仕事を示唆する言葉が必要ということであり、そしてその言葉は天体空間ではなく、地球空間としての空間に起因する、ということである。我々地理学者は世界を「空間的に」みつめる。ときに私はこの考え方を質問表で考えるようにしている。歴史家は世界を時間的にみつめたり、年代的にみつめたりする。経済学者と政治学者は構造的に把握しようとするが、我々地理学者は世界を空間的にみつめる。質問者は難しい顔つきをしながら、理解に苦しむ様子で、*USA Today*を取り出し、幸運を祈って、最新の地理学能力テストの結果を読み始めるだろう。

我々が住む世界の営みを説明するのに、空間的分析を用いるのは、もちろん地理学者に限ったことではない。経済学者や人類学者、あるいは、その他の社会学者も、ときに空間的視座から考えることもある。もっとも、彼らの叙述からはそれが遅れたものであることを窺わせる場合が多い。著名な経済学者ポール・クルーグマンがニューヨーク・タイムズ紙にコラムを寄稿し、地理学文献では廃れて久しい空間的定理を再発見したとき、地理学者は喜んだものであった（いらいらした人たちもいたが）。生理学者ジャレド・ダイアモンドの権威ある著作『銃・病原菌・鉄』は、ニュー

ヨーク・タイムズ紙記者ジョン・N. ウイルフォードが、「近年で最高の地理学書」と書いているが、地理学者はその中に顕著な概念的弱点を指摘している（Diamond, 1997）。ダイヤモンド氏は洞窟壁画に注目しただけでなく、それに対して印象的な行動をした。UCLAの地理学科の教員として、かつて繁栄した社会が崩壊していったその地理学的要因を考察した後、続編を著したのである（Diamond, 2005）。

ダイヤモンドはこの二つの労作において、微妙な問題を提起しているが、それはかつて地理学研究の中心的な課題であった。すなわち、人類の運命において自然環境の果たす役割ということである。20世紀初頭、この研究は中緯度社会の「活力」と、熱帯民族の気候に対する「無気力」を説明するということで、一般論に発展していった。こうした単純な分析は、欠陥が必ず表面化するというだけでなく、あらゆる信頼を失わせて世界の現状を解釈しようとする民族主義者が悪用しかねない証拠となるおそれがある。しかし、根本的問題はダイヤモンドが主張するように、解消したわけではなかった。今日我々は人類の分布や行動はもとより、環境の変化やそれに関する生態系の変化についても、非常に多くのことがらを知っている。そして、そうした問題点が新たな関心を生んでいる。

しかしながら、複雑な環境に対して単純な因果関係を当てはめようという誘惑も、地図がそれを示唆するがために、依然残っている。別の著名な経済学者ジェフリー・サックスが、米海軍大学で講演した内容の次の引用を考えてみるとよい。

「世界中の富裕な国は実質的にすべて、熱帯圏外にあり、実質的にすべての貧困国はその圏内にある——そして気候は、世界中の所得の国家間及び地域間格差の極めて顕著な比率を説明する」

（Sachs, 2000）。それは合理的結論にみえるかもしれないが、世界中の多くの貧困国の現状は、はるかに複雑な事情に起因している。例えば、その中には長らく不利益を強いた征服や植民地化、搾取、弾圧などがあるものの、気候はサックス氏が

言うように顕著な要因ではなかろう。いずれにせよ、世界の貧困国の多くが熱帯にあることは事実とはいえ、アルバニアからトルクメニスタン、モルドバから北朝鮮にいたるまで、そうではない国が他にも多数存在している。地理学的メッセージが、環境を一般化するのに役立つとはいえないのである。

もちろん、我々の主張に地理学者以外の人たちが参加してくれることは、喜ぶべきことである。しかし、そのことで、研究者の学問的定義を一般人に受け入れさせようという我々の努力が容易になるものではない。思うに、場合によっては、こうした困難が地理学の強みとなるのであろう。地理学は発見に関する方法論を有しており、その「空間的」保護下において我々は過程や制度、行動、それに空間的表現をもつ他の多くの現象を研究したり、分析したりする。地理学者を連携させるのは、この結びつきであり、すなわち、こうしたパターンや分布、拡散、流通、相互作用、並置にかかわる関心であり、自然界と人間界とのおかれている、相互の結びつきと相互作用のそのありように対する関心である。もちろん、熱帯環境によっては、農家に過酷な病気を発生させるような地域があるのも事実である。しかし、それよりも過酷なのは、熱帯の農家の生産物に対する富裕国の関税障壁や、大規模農業ビジネスに支払われる補助金である。こうした慣行を終わらせても、地球規模で貧困が拡散していく上で、その「顕著な」要因に突如として気候が出現するようには思われない。

それゆえ地理学のカバーする領域は広く、地理学者は様々な研究を広範に追及することになる。最近では多くの社会的活動などの分野も含むようになっており、それは地理学というよりも社会学に近いかもしれない。しかし、地理学的研究の多くは空間的であり、現実的なものである。私の同僚の中には、アマゾンの伐採や西アフリカの砂漠化、アジアの経済統合、インドネシアの移民問題に焦点を当て研究をしている人たちがいる。他方で、プロ・フットボールと選手の出身地や所属

チーム、教会の構成員と福音主義の変容パターン、現代の地球温暖化時代におけるワイン産業の台頭、米中西部地方におけるNAFTAが製造業の雇用に及ぼす影響のように、アメリカに固有の現象を個別に調べている人たちもいる。私は常に、彼らが何を発見しているのか、専門誌においてそれを読むことに関心がある。また、学生に対していつもいつてきたように、発見の時代は終わったかもしれないが、地理学的発見の時代に終わりはないのである。

空間の専門家

地理学が黎明期に胎動し始めた頃や、ギリシアとローマの拡大、ヨーロッパの多様化、そしてそれが地球規模で普及した頃の活動的な話は、開拓期の観察伝説や英雄の探検、創造的な地図製作、向上を遂げる解釈といったものであり、方法論で先行する歴史家によってその詳細が魅力的に議論されている (Martin, 2005)。今日我々がグローバル化と呼ぶその最初の波を、ヨーロッパの植民地主義が打ち出すはるか以前に生粋の地理学者たちは、朝鮮半島からアンデスまで、インドからモロッコにいたるまで地図を作製し、景観を解釈していた。後年、地理思想がヨーロッパのナショナリズムに巻き込まれるようになると、ドイツやフランス、イギリスといった様々な地理「学派」は、領土拡張主義や植民地主義、さらにはナチズムさえも含む、国策的野望や戦略的野望を反映するようになっていき、そして、それを支持したり、正当化したりするようにさえなっていた。アメリカにおいても地理学は、専門分化した思想的な学派を生み出していったが、それを定義づける (区分する) 問題は、政治的というよりもむしろ学術的傾向にあった。こうしたアメリカ学派のうち最も有名なものが、カリフォルニア大学バークレー校を長年拠点としてきた人々であり、文化地理学者カール・サウアーの強い個性で一大勢力を示した。この学派の中核的概念とは、社会の生活様式はそれがどこであろうと、空間分析で

表象される「文化景観」としての地球の上に刻まれている、とする考え方であった。

地理学者は幅広い視座をもつだけでなく、長期的な視座ももち合わせている。我々は樹木のために森林景観を損なうことのないよう努力するし、空間的視座はもとより時間的視座からの発見にも努めている。「地理学は総合的なものである」とは、地理学とは何かという質問に対する極めて明快な答えである。すなわち、地理学者は未解決の問題を解くために、明らかに異種の情報を結びつける方法を探ろうとする。後で明らかにされるように、時にこうした斬新な一般化によって、まさしく実りある方向に研究が向かうことになるのである。

しかしながら、今日では一般化と仮説化を行うには勇氣がある。我々すべてが知っているように、今日は専門分化の時代である。しかし、専門化された研究は我々が直面する大きな課題とも何らかの結びつきをもつべきであり、あるいは、その存在価値を問う理由があるはずである。50年前にノースウエスタン大学の教授の一人が、「知的ディナーでの会話」(古風な文化的伝統で、都市によってはいまだにみられる場合もある) というものを実践するよう、私と同期の学生によく促したものであった。「自分が何をしていた、なぜそれが重要なのか、食卓の向こうのゲストにふつうの言葉で説明できるよう、いつも準備しておくように」と彼はいつていたものである。我々の多くはそうしたことは不必要であるのみならず、学問は「一般人の」かわるような問題ではない、と考えていた。しかし、彼は正しかった。専門の地理学で現在起きている議論を彼なら楽しむことができるだろうし、また、彼の議論の多くは我々が何をしているのかについて、平易な言葉で大衆に話しかけようとするものになるだろう。

もちろん、研究と教育の特化は様々なレベルで起きている。既に述べたように、地理学者の中には (以前よりも少ないが) 依然として地域の専門家や、別の言い方をすれば、地域研究者になる人々もいる。他方で様々な空間的視座から都市化

を研究する人たちもいるが、その場合彼らの研究は、不動産価値と賃貸に対する高度に分析的研究から、都市間競争の理論的な評価にいたるまで様々である。特に興味深い問題の一つは、都市間の相互作用を量的に測定しようという試みである。二つの大都市が相互に極めて接近して立地している場合（例えばボルチモアとフィラデルフィア）、遠距離に立地している場合よりも（例えばデンバーとミネアポリス）、相互作用は一段と強くなる（通話から道路交通にいたるまで）。しかし、この相互作用の水準が、都市規模や都市間距離によってどの程度違ってくるのか。その答えはいわゆる重力モデルにより具体化されている。これは単純な公式によって相互作用を説明するものである。すなわち、二都市の人口を乗じて合計を二都市間距離の二乗で除する。キロメートルでもマイルでも、あるいは、他の距離単位でさえ使うことができるが、比較目的で一貫性をもたせる限り、このモデルは予測現実性という点で効果を発揮するだろう。距離は相互作用にとって強い障害となり、地理学者はこれを距離通減というが、この要素を測定することは事業や商業活動上の意思決定をする際、はかり知れないほど有益である。

他の地理学者は経済学と地理学とを結びつけ、経済活動の空間的側面に焦点を当てている。環太平洋地域における世界の新興経済大国の台頭は、こうした学者たちが多忙になる要因である。

さらに、他の地理学者たちは政治活動の空間的側面に焦点を当てている。政治学は制度に焦点を当てる傾向にあるが、政治地理学者は政治にかかわる分布状況に焦点を当てる。政治地理学の初期の一分派である地政学は、ナチの政治思想に飲み込まれてしまい、その評価を損なうこととなった。しかし、近年地政学は本格的に、客観的な研究分野として再登場するようになってきた。権力関係から境界研究にいたるまで、政治地理学は魅力にあふれる分野である。

地理学には文字通り数十もの専門分野が存在するが、学生にとって地理学を職業として考えるということは、キャンディー店にいるのと少し似て

いる。人類学に関心があるのなら、文化地理学を試せばいい。生物学であれば、生物地理学がある。地質学であれば、景観の進化を調べる地形学を忘れてならない。歴史地理学は関連する学問分野同士の間で、明らかに実りある連携がなされている。こうした選択のリストは長いものになるし、依然としてそれは拡大しつつある。地図製作法の発達は技術志向の地理学者にとって、まったく新たな地平を切り開いた。

地理学者による研究生活をみると、多くの地理学者が途中で専攻を変えており、私もその一人である。私は自然地理学者としての教育を受けたが、それは景観研究（地形学）及びその関連分野を専攻するというものであった。こうして私は人文地理学同様に、1年をアフリカ南部にあるスワジランドでの現地調査に費やし、広大な峡谷がアフリカ大地溝帯の一部を形成するものなのかどうかを見極めようとした。しかしながら、この研究の準備をしている際に、アーサー・ムーディーという政治地理学者に出会った。彼は客員教授としてノースウエスタン大学に来ていた英国人研究者であった。私は彼の講義を聴講したが、それは忘れられないものとなった。自然地理学者としてミシガン州立大学に任用されるようになって、私は他方で政治地理学の文献を読み、その研究を続けるようになっていった。結局、その分野の講義をもつよう要請を受け、それに関する本と論文を著し、副専攻として発展させていった。

当初わからなかったのは、いかに自然地理学の素養が政治地理学の役に立つのか、ということであった。地政学同様に環境決定論は両大戦間で悪名をはせた。それゆえ、環境要因に影響されたかのように、政治や社会の発展を説明しようとするのは、専門的にみて危険であろう。しかし、地政学同様に環境研究は再びよみがえるという確信が私にはあった。そして、そうなったとき、議論に参加できる素養が私にはあった。以上が後年ジョージタウン大学に任用され、外交問題研究所で環境問題を講義するようになった経緯である。

他の新しい分野に私が手を染めたのはただ一つ

で、それはこれまで自分が体験してきた他の地理学的経験同様に楽しいものであった。すべては一本の偉大なワインから始まった。1955年もののシャトー・ベイシュヴェルのボトルを伴った運命の夕食会が、私の好奇心を非常に刺激したため、5年後に私は『ワイン：地理学的賞味』という題名の本を執筆することになっていた。マイアミ大学でワインの地理学なる講座をもつようになり、学生の中には極めて有益な素養を身につけてワイン事業に入っていく者もみられた。地理学には制限がほとんどなく、専攻には厳然とその利点が存在する。

しかし、地理学は重要なのか

自動車のバンパー・ステッカーで、何年か前にはやった「これが読めるなら、先生に感謝しなさい」というのを覚えているだろうか。ある日、フロリダのフォート・ローダーデールとマイアミ間を結ぶ、私の好きなハイウエー・インターステート95を走っていると、ある車が追い越していった。その車の所有者はかのステッカーをもじって、「これ」の代わりに「この地図」と置き換え、文の後尾に道路地図を貼り付けていた。その車の所有者の職業が何か尋ねる必要はなかった。明らかに地理学の教師だからである。

現実には地図を読めない人が多い。調査によれば、地理学以外の教育を受けた人たちの大多数は、地図を効果的に利用する方法を知らないという。単純な道路地図でさえ我々が想像する以上に読めないのである。いつも地図を使っていて、おそらく結果的にその使い方を覚えたというような人たち、例えば旅行業界の人たちは、地図で困ることが多いものである。半年ほど私はケープ・コッドに住んでいたことがあるが、自宅から2時間にあるボストンのローガン空港から離発着するときには、少々不安な楽しみを味わったものである。今日のフライト・スケジュールは、かつてのようではなくなっている。そのため、誰かが自分の旅行を手配してくれるときには、私はいつもプロヴィ

デンスのケープ中心部から約2時間の別の空港に手配してくれないものかと思っている。

地理学の有効性は、2004年12月26日の悲惨な津波の直後、ニュースに取り上げられるところとなった。ティリー・スミスという名の生徒の話が、世界中の新聞の見出しをかざったのである。ティリーはタイのプーケット島で両親と休暇を過ごしていた。海面が突然はるかかなたに後退していくのを目撃したとき、彼女はマイカオ・ビーチにいた。そこで彼女は、ロンドン南部オックスフォードのデーンズ・ヒル小学校で地理学のアンドルー・ケアニー先生に教えられたことを思い出した。つまり、津波の大きなうねりは、海岸線に押し寄せる大きな壁となって引く前に、ビーチの海水を吸い寄せてしまうということ。ティリーは両親に急を告げると、いったりきたりしながらビーチにいる人たちに危険を知らせ、近くのホテルの上層階に避難するよう促した。およそ100人がその忠告に従った。そして、その人たちはすべて助かった。これに対して、海辺にいた人たちは誰も助からなかった。英タブロイド紙はティリーを「プーケットの天使」と呼び、同時に生徒にはっきりと注意を喚起した地理学教師にも栄誉を与えた。

そう、あなたはこう尋ねるかもしれない。地理学は生活において、多少は予言と効率を発揮する日々の道具として、また、ときに環境的警告を発するものとして、その役に立つだろうが、しかし、一般常識において重要なのであろうか、と。

次のことを考えてみて欲しい。地理学に明るくない一般大衆は、あらゆる間違った情報を信じやすい。今日でさえナショナル・ジオグラフィック・ソサエティとその仲間たちが、熱心に努力しているにもかかわらず、アメリカ人学生は幼稚園から大学院まで、地理学の完全な講義はもとより、まったく地理学に触れることなく卒業してしまう可能性がある（他の開発途上国ではそういうことはないし、多くの先進国でもそれはない。地理学の地位はイギリスやドイツ、フランス、さらにブラジル、ナイジェリア、インドといった国々では

アメリカと相当異なる)。これは科学者の集団が、氷河作用が今にも始まりそうだとしたとき(1960年代にそうであったように)や、温室効果が迫っていること(2000年代の関心事)を予測し、大衆の注意を促そうとしたときのように、議論を理解できる十分な知識を与えられている人があまりに少なすぎると、国民に選挙で選ばれた国会議員により、別のことに数十億ドルの投資を回したほうがよい、と論駁されかねない。

公開講座で巡回していくと、こうした問題について話す機会がある。聴衆の中には地理学の現状に関し私の見解を問う人も多い。議論のなりゆきによっては陰悪な雰囲気になる場合もあるが、心配しなくても、我々の選んだ政治家は一般人が知るべき地理学とは何かを把握している。彼らは概して日常生活にかかわることがらを扱うので、間違いなく情報を適切に確保していて、心構えもできている。

もっとも、学部や大学院のカリキュラムでまったく地理学を教えていない、エリート大学卒の政治家たちのことは気がかりである。ロバート・マクナマラ元国防長官が、母校(ハーバード)で基本的な地域地理学か、人文地理学の講座の一つでも受けていたならば、彼の東南アジア全域、特にベトナムに関する展望というものは、異なる状況になっていただろうと想像してしまう。私はそう思うが、ハーバード大学は学生に対して、およそ半世紀もの間地理学を講義してこなかった。国家に対するコストは、我々が想像する以上に高いものになっているのかもしれない。

政治家たちが舵取りをしなければならない世界の、その地図に関する知識については、ニクソン大統領の執務室での次の小さな事件を考えてみるとよい。それは、もう一人のハーバード出身者であるヘンリー・キッシンジャー元国務長官の著書、『再生の時代』(Years of Renewal)の中に描かれている。

国連の何かの記念式典で、モーリシャスの首相がワシントンに招待されたことがあった。モーリシャスはインド洋に浮かぶ亜熱帯の島で、——降

雨量が多く、緑豊かな農業を享受している。対米関係は良好である。同僚の中には、モーリシャスとモーリタニアを混同する者も若干みられた。後者は西アフリカの乾燥した砂漠で、1967年に対米外交関係が途絶しているが、それは中東戦争の結果、ムスリム同士の連携が進んだためであった。

この誤解が法外な対話を生むことになった。端的にいうと、ニクソンは米・モーリシャス間の外交関係を修復する時期に来ていると示唆したのである。この彼の発言により、アメリカからの援助が再開されることになるだろうし、その恩恵の一つは乾燥農業への援助ということになるだろう。そこでニクソンは、アメリカには特別な技術があることを表明したものである。潤沢な降雨量のある国からの親善使節である訪問者は仰天し、苦勞してもっと有望な課題に話を移そうとした。そこで彼は、アメリカが自分の島で設営している宇宙観測局の運営に満足しているかどうかを尋ねた。

今度はニクソンが困惑する番で、彼は黄色いメモ帳に猛烈な勢いで書付を始めた。それを破ると、私に手渡したが、そこには次のように書かれていた。「一体なぜ外交関係のない国に宇宙観測局があるんだ」(Kissinger, 1999)。

かようにワシントンにおける地理学の知識は、あまり確かなものではない。ベトナム戦争にうっかり入り込んでしまった(マクナマラの言)とき、インドシナの自然地理学なり文化地理学なりに関し、我々にあまり知識がなかったのは確かであるし、2003年冬、イラクにおける地域地理学や人文地理学に関する政治家の知識に、多くの人々が疑問をもっていたことについても確信がもてる。道路に列を成して歓声を上げて喜ぶ群集を思い出せるだろうか。地理学を教える際に私はよく戦争に関するそうした古い虚報を引用するが、我々の場合、次の言葉を付け加えておかなければならない。後手に回っている、と。

地理学を学習する上でおそらく最も重要な副産物は、迅速であれ後手であれ、孤立主義への対抗策としての役割であろう。これ以上に決定的に重要な目標があるのか。我々はグローバル化してい

く過程で、かつてないほど相互連結が進み、依然過剰人口を抱え、次第に競争が激化し、危険な世界となってきたが、この世界において知識は力である。自分たちの住む惑星と脆弱な自然環境について、あるいは、他の民族や文化、政治制度や経済、国境や境界、ものの考え方や願望などについて、知れば知るほど、前途にある挑戦的な時代に向け、準備が整うことになるだろう。

こうした視点からみて地理学の重要性は、他にひけをとらない。

どうしてこうなるのか

次のことは誰も否定できないだろう。すなわち、一般的な重要性にもかかわらず、学校の教科とアメリカの大学での専攻としての地理学は、控えめにみても過小評価されている。しかし、これはずっとそうだったわけではない。ハーバードとエールで学問的に地理学が確立されていた時代もあったし、それはアメリカの学校で地理学が広く教育されていたときでもあった。第一次世界大戦中及びその後、大戦間の時期、そして再び第二次世界大戦中及びその後、地理学はアメリカの教育上重要な科目として位置づけられていた。戦前の議論や戦略、それに戦後の再建において、地理学は有効性を発揮し、時には決定的に重要な役割も果たしてきた。地理学者は環境問題を大衆の関心として引き寄せた、その第一人者である。彼らは外国の文化や経済について知悉している。また、国境で仕事をした経験もある。アメリカの政策を導く一助となる地図も作製している。

1950年代及び60年代になっても、アメリカ人は地理学に精通していた。第二次世界大戦中におけるアメリカの成功は、おそらくいまだかつてないほど国外に対する我々の関心を引きつけるところとなった。地図や地図帳、それに地球儀が数百と売られていた。地理学の名前を冠した雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」は、空前の購読数を示していた。大学の地理学科は収容可能な以上に学生定員を受け入れていた。ジョン・F. ケネ

ディが平和部隊を創設したとき、地理学者と地理学専攻学生は、すぐさま指導者とその要員に任命されたものである。

しかし、うまく機能するシステムを社会工学者らが手に入れるようになったときしばしばみられたように、脱線が始まった。それぞれの専門教育者が、地理学をいかに教えるかということについては、自分たちのほうが優れた考え方をもってると考えるようになったのである。要するに、歴史学や行政学、地理学といった学問を学生に教えるよりも、こうした科目を組み合わせで教えるほうがよいと考えるようになったのである。こうした組成は社会学習と呼ばれた。学生に対して包括的教育を施すような組み合わせが基本計画で描かれ、これが一種の大衆向け公民教育であるとされたが、これは教師もまたそれぞれの専攻分野での専門教育を受けることは、もはやなくなることを意味した。これは教師もまた社会学習をするようになる、ということであった。

1970年代初頭のマイアミ大学の場合、教育学部を卒業して有望な教師になったのは、私が受け持った学生のうち、最優秀で最も関心を引く複数の学生であった。彼らは二つの講座に多く履修登録していた。一つは世界地域地理学で、広く世界の地理学を概観するというもの、もう一つは環境保全で、当時では数年先に行く講座であったが、それには生物学科の学生も履修していた。しかし、社会学習の計画が有効性を発揮するようになると、教育実習生は講義に出なくなってしまった。今度は地理学の履修登録を妨げるような、別の履修条件が発生するようになったためである。

我々地理学者は、これが何を意味するか、また、最終的にこの国にいかなる犠牲を生むかについてわかっていた。地図の知識とそれを利用することは、廃れていくだろう。環境への関心も低下していくだろう。ビジネスマンや政治家たちの知識は、急速に小さくなっていき、一段と相互連携の深まる、競争の激しい世界で、自分たちが不利な立場におかれることに気づくようになるだろう。我々の多くは、苦悶に満ちた書簡を政府や国会議員、

学区の責任者、学校長宛に送った。幸いにも、私立学校やミッション系学校の多くは、引き続き地理学を教えていた。しかし、公教育においては、さいは投げられたのであった。

運命の逆転

10年と少々で教育環境は、まさしく地理学者が予測したようになった。明らかに国民の地理学的知識が低下したのである。当時教えていた我々すべてが、学生の方向感覚がなくなっているという体験をもっていた。中にはそれを面白がる者もいたが、大半はそれを心配していた。まさしくその名のとおり、広範な社会学習の慣習は、高校の地理教科の一部であった、基礎的だが必須な自然地理学的（基礎的な気候学を含め）課題を排除することになった。気候や天気の仕事はもとより、これは人と環境の相互作用を理解することの重要性を学生がわかるようになる科目であったが、大きな損失である。こうした生徒たちが大学に行き、一年次の地理学講座に履修登録するようになると、彼らは非常に大きな不利益をこうむることとなった。つまり、こうした基礎がまったく彼らにはないのである。

大学の学部によっては、こうした状況を理解するようになるところも現れ、何らかの対策を講ずるところも出てきた。ジョージタウン大学はそうした大学の一つであり、1990年から1995年にかけてジョージタウン外交大学院の教員として勤めていた頃私は、その結果を直接目の当たりにすることとなった。全入学生は「現代世界地図」と呼ばれる講座が必修であったが、それは高名な政治地理学者チャールズ・ピートルによる一単位の寄附講座であった。一学期において学生たちは、政界の仕組みにつき知見を広げるよう期待されていただけでなく、地政学的変化の一般的パターンや一般的环境、気候状況、資源分布についても知識を広げることを期待されていた。それは高度な要求であったが、私にとって最も印象深かったことは、4年間の課程修了時にジョージタウンの学生たち

が、何よりも自分たちの知識を前進させた講座名をあげるように、いわれたときのことであった。

「現代世界地図」は一年次生の地理学講座で、ほとんどの学生がとうに忘れていだろうと思われるににもかかわらず、それが毎年上位にランキングされていたのである。これは間違いなくチャールズ・ピートルの功績である。しかし、同時にそれはまた、こうした有能な学生の意見に、何らかの地理学的妥当性があることも物語っている。

不幸なことに地理学はジョージタウンの補修教育では極めてまれであり（今もそうである）、一般的ではなかった。新入生の地理学的能力は、多くの初學者用クラスにおける論理的思考水準を低下させていたため、教授陣はその対応策として様々な方法を考案した。ある教授たちの中には、他の人よりも学生の問題に敏感というのか、自分のクラスで当惑した話しを時々こぼしている人たちもいた。こうした中にはマイアミ大学の同僚もいたが、彼は世界各国の白地図上に、多くの有名な地名を示すよう学生たちに指示することで、クラスを始めることを好んだ。結果はいつも極端に悪く、年々悪くなっていった。よい教授はクラス全体を採点して、聞くところによれば、皮肉を込めてこういったそうである。出席者の大半は太平洋やサハラ砂漠、メキシコ、中国がどこにあるのかわからない、と。

1980年の秋学期のはじめ、学生新聞「マイアミ・ハリケーン」はテストやテスト結果の概要、そして教授のウイットに富むコメントのこを取り上げた。「地理能力」に関するこの話しは一面に掲載され、主要紙にも取り上げられることになった。NBCの「トゥデイ」という番組がキャンパスに取材にやって来た。ABCの「グッドモーニング・アメリカ」では学長をニューヨークに招聘したが、時間が短すぎて問題の核心をつくことはできなかった。

しかしながら、そのニュースは全米に広がると、マイアミ大学当局ではこの話が大学の評判にいかなる影響を及ぼすのか思い悩むようになり、他の

教員も自分の教えている学生に独自のテストを実施することとなった。我々すべてが結果について熟知するようになった。中西部のある大学では、世界地図の上でベトナムを示せる学生は5%にすぎなかった。他の大学では米南部に境界を接する国をメキシコと正答できたのは、わずか42%にすぎなかった。技術者に対する学校地理学の崩壊を招いた、当の教育者たちも含め専門家は、こうした結果に「愕然とした」と述べた。地理学者は驚くこともなかったが、問題は、この恥ずべき無知の流れをいかにしたら逆流させられるのか、ということであった。

社会に入る

キャンパスにおける地理的知識の欠如という話しは、新聞紙上で大衆による地理的能力の欠如という話しに発展していった。記者たちは簡単な世界地図とアメリカの地図をもって街頭に出かけ、無作為に人々にニューヨーク州や太平洋といった場所がわかるか尋ねて回り、大喜びでその恥ずかしい記録を報道していた。しかし、この話しはいつもおどろき忘却のかたに置き去られていった。

しかし、次いであることがきっかけで、この構図が根本的に変わることになる。レーガン大統領が、ある重要な国際会議を開会するためブラジルの首都ブラジリアに到着したとき、ボリビアにいる——ことができて嬉しく思う、といってしまったのである。この事件でブラジルは大騒ぎとなってしまい、彼の過失はUSA Todayの一面で取り上げられ、他の政治家にも似たような無作法がないか確認するため、当紙は忙しくなっていった。今度は地理的能力ということが突然大見出しになってしまい、テレビでもそれを特集するようになった。その一つであるABCテレビではマイアミ大学に電話をかけてよこし、私がボルチモアで会議に出席しているとき、そこのホテルにこの電話を転送してきた。この電話は私が「グッドモーニング・アメリカ (GMA)」に出演する最初のきっかけになった。私が担当した部分(オランダ)への反

響のせいで、数カ月後に1週間の地理番組をつくることになり、それに続き地理学の編集者としてGMAから6年がかりで依頼されることになった。

しかし、国民の地理能力の欠如に本格的に取り組むには、GMAの鋭敏な上級プロデューサーであるジャック・レイリーの支援だけでは不足であろう。しかし、あいにく1984年にはナショナル・ジオグラフィック・ソサエティー (NGS) の編集を担当していたため、それとも重なってしまっていた。1980年には幸運にも、同ソサエティーの研究調査委員会に所属できたことから、私はすぐにソサエティーを運動に取り込む方法を考えることにした。ソサエティー会長のギルバート・M. グローブナーは、この考えに同調してくれた。ソサエティーの委託を受けて実施されたギャラップ社の世論調査は、アメリカ人学生はヨーロッパ人学生や他の国の学生に比べ、間違いなく地理的能力ではるかに遅れているという事実を明るみにしており、この結果に彼は刺激されたようである。1984年にNGSで6年に及ぶフルタイムの編集の仕事に携わるようになると、協力を進めていく上で非常に有益な支援を受けられるようになった。

大半の研究者たちにとって、ナショナル・ジオグラフィック (地理学)・ソサエティーという組織が研究者たちの支援をすることは、自然なことだと考えていたようである。しかし、話しはそれほど単純ではなかった。長らくソサエティーと研究者たちとは、良好な関係になかったのである。ソサエティーとその幹部らにとって、専門家集団の地理学者らは専門家ぶっており、隔絶された世界で想像不可能な人たちである、というふうにみられていた。専門家集団の地理学者らは、ソサエティーの発行する雑誌の人気化と地理学に関するその内容は不適切で人を惑わすと思っていた。大学院生として1956年にノースウエスタン大学に入学したとき、「ナショナル・ジオグラフィック」なんぞ、取るに足りない悪名高い地理雑誌にすぎない」と私の指導教授はいったものである。「定期購読したいなら、自宅に送付してもらおうほうがいい。学科内のメールボックスでそれを目にするの

は賢明でない」。

驚きだった。それどころか、1950年代初頭にアフリカで暮らしていたとき、「ナショナル・ジオグラフィック」は私にとって世界への窓口であったし、そこに掲載されていた地図はひらめきの源泉であった。1950年、その旨を伝えるため会長ギルバート・H. グローブナーに手紙を書いた。彼は感謝の意を込めた返信を書いてよこし、地理学に関心をもち続けるよう促し、「もし（私が）アメリカに來られるようであれば」と、ソサエティー本部に私を招待してくれた。しかし、大学院生としての私は、ナショナル・ジオグラフィック・ソサエティーとその出版物は、「専門家である」地理学者の間で一般的に高い評価を得ていないことにすぐ気づいた。

しかし、グローブナーの孫に当たるギルバート・M. グローブナーは、こうした過去のことにとらわれるような人ではなかった。学校教育レベルでの地理学を支援するため、彼は予算面と教育面で大々的な運動を展開していたし、学問の将来のカギになるのは学校と教師であることを、誰よりもよくわかっていた。また、多くの高校生は地理学を専攻するために大学に入るわけでないことを理解していた。彼らは卒業後の選択肢として、地理学を想定することはないからである。社会学習の完敗は地理学教員の地位をまったく低落させてしまったので、手始めの仕事としては、地理教科を教える教員数を大量に確保することにおかれた。科目として地理自体衰退していたため、グローブナーは地理教育の著名な専門家であるクリストファー・「キット」・サルターを、復活のために任用することにした。サルターは5～6名程度のソサエティー内の地理学専門家と協議し、地理学の「五つのテーマ」として知られるようになる空間的、環境的要素に基づく枠組みを打ち出していった。1986年、ソサエティーは、「地図、景観及び地理学に関する基本テーマ」と題したカラー版の注釈入り地図を数百万部印刷して、全米の学校に必要とされる分大量に供給した。

一方、サルターはNGS支援の下で、全米各州を

代表するいわゆる地理学連合（Geographic Alliances）の全国ネットワークを組織化した。この連合は様々な方法でソサエティーからの支援を受けた、地理教師から構成されていた。各連合の代表が、ワシントンにあるソサエティー本部に地理教育の研修のため招かれた。次に彼らは各自の州で教員を集め、自分たちの学んだことを伝えていった。地理教育の有資格者である教員数は急激に増加し、全国の学校で地理科目復活を支援する草の根運動も沸き起こっていった。

グローブナーはこの計画のために大幅に予算を増額し、国民の教育水準における本質的要素として、地理学のために連邦議会で証言し、地理学的重要性を訴えるべく政治家を呼びとめ、全国を駆け巡った。ワシントンの彼の仲間が、こうした試みに必ずしもすべて熱心だったわけではなく、まして支援をしたわけでもなかったし、さらに、必ずしもすべての地理学の専門家が、自分の所属学科に彼がしたことに対して、謝意をもっていたわけでもなかった。しかし、米地理学者連合の幹部は、その運動に対して正式に承認を与えるという良識を示し、その運動はソサエティーと専門家との間の長年に及ぶ、痛ましい不協和の歴史に幕を閉じることになった。

では我々は今日どこにいるのだろうか。上記のようなことすべてが、地理学の初等教育や中等教育における水準への強い警告となっている、というように報告できたと思う。しかし、前途は長く多難である。ソサエティーの運動が始まったとき、約7%のアメリカ人学生が何らかのかたちで地理学に関わっている、という状況だったが、およそ20年後の今日、およそ1億ドルの投資結果をもってしても、その数値はいまだ30%に満たず、なおかつこれが最良の評価なのである。道のりは長く遠い。

地理学は歴史になるのだろうか

学問としての地理学のおおまかな将来展望を、私の同僚が行ったことがある。そう、米連邦議会

では毎年11月にナショナル・ジオグラフィック・ウィークを設けることと、ナショナル・ジオグラフィック・ビー(有名なつづり字の競技会spelling beeに範を取った)の勝者には、毎春テレビ出演を確約している。大半はナショナル・ジオグラフィック・ソサエティーの努力の賜物であるが、第一次ブッシュ政権時の教育長官(当時)ラマー・アレクサンダーの在任期間中に、地理学が全米教育における基礎5科目の一つとして指定されるようになった(第二次ブッシュ政権時の「遅れをとる子どもを出さない」計画で地理学は、あまりうまく機能していない)。

しかし、公的部門におけるこうした有望な展開に反して、特に二つの点で悩ましい欠点が生じている。それは歴史に固執する文化である。考古学から地質学、古生物学、言語学にいたるまで、我々は時間に焦点を当てる傾向がある。高等教育における空間科学は、地理学が学校教育でやっているようなレベルにやっと動き始めたにすぎない。アメリカ人にとって歴史学科のない大学やコミュニティ・カレッジ(それが権威あるところであれ、そうでないところであれ)は、考えられない。ハーバードでも中西部のコミュニティ・カレッジでも、基礎課程で歴史を外すところはない。同じことは地理学ではいえない。

地理学の専門家は先述したように、各自の専攻の方法論に分断されている。おそらくそれは健全な議論であろうし、初めての議論でもなく、他の分野でも同じことは起きている。しかし、我々の学術雑誌を読んでも、我々のコンセンサスがどこにあるのかよくわからないのであれば、大学やコミュニティ・カレッジの経営者たちは、混乱するだけだろう。歴史や人類学、生物学のほうをはるかに明確に定義づけられている、と彼らは考えている。

この問題について私は、極めて基本的な見解をもっている。我々の基本的な共通基盤は、学部レベルでさえ専攻を始めるとき、学生が必要とする手法(統計分析から地理情報システムにいたるまで)と並んで、地域地理学や人文地理学、自然(環

境)地理学にあるのだと思う。これを超えて、我々を結びつけるものは(しかし、別の方向に行く人々を必ずしも束縛するものではない)、空間的視座と空間的分析である。地理学の方法論的将来性を疑う者には、環境分野と人文分野との接点に我々の偉大なる可能性は存する、といっておこう。我々はこの点において、20世紀の中でも条件のよいほうに生きてきたし、その時代の同時代人に比べて先を行っていたといえる。

地理学が歴史になるということについては、学術的にはもとより一般大衆にも自分たちのやり方を説明できる歴史家のやり方をうらやましく思うことを、告白しなければならない。いつもテレビをつけるたびに、前大統領のよい業績と悪い業績とをコメントする「大統領の歴史家」をみかけるような気がする。そして、肯くのである。ニクソン大統領がウォーターゲート事件について知っていたことと、いつ彼がそれを知ったかについて確かに時々思い出したほうがよい、と。結局、いつ、ということが歴史のカギとなる問題点である。しかし、最近では問題を喚起してくれる大統領が現れた。すなわち、大統領が何をどこでしたのか、ということである。それは地理学である!我々には大統領にふさわしい地理学者が必要なのだ!この趣旨で私は提案したものだが、いくつかの理由から放送局に却下されてしまった。

地理的能力と国家安全保障

地理的能力は我々の国家安全保障に関して決定的に重要である。様々ないまだみえざる進化の中で、大規模な環境の変化や人口移動、頻発する民族紛争、経済超大国としてだけでなく地政学的にも顕著な中国の台頭、国際舞台における統合ヨーロッパによる主役への変容などを目撃することになる、この世紀の境目を越えて我々は踏み出した。私の同僚の中には、来るべきエネルギー危機の可能性や大量破壊兵器とその削減問題、あるいは、特に脆弱な地域における地球気候変化の影響とその対策を研究している地理学者がいる。これらは

実に深刻な問題であり、地理学の知識だけでは解けないが、かといってそれなくして効果的にその問題を解くこともできないだろう。例えば、大量破壊兵器の拡散は思想だけでなく、技術によっても推進されてゆくものである。技術は他の学問分野のことであるとはいえ、思想は明らかに地理学の一分派である。山岳地帯の拠点及び遠く離れた西部パキスタンから、アフガニスタンにおいて権力を掌握しようとしたタリバンの動きを加速したのに象徴される急進主義は、孤立した地域で形成される傾向にあるし、それはまた何らイスラム固有のことではない。国民に法外な犠牲を強要するような破綻国家は、地球規模での相互作用と相互交流の潮流から隔絶された状態にある場合が多い。ソマリアからアフガニスタン、カンボジアからリベリア、ミャンマーから北朝鮮にいたるまで、こうした国の国民はすさまじい犠牲を払っている。

地理学は孤立主義と偏狭な地域主義とに対する、優れた処方箋である。我々のいつまでも改善されることのない国民の地理的能力の欠如は、二つの大洋と二つの国家にはさまれた「これ以上ない」孤立状態に起因するものである、とさる地理教育の専門家は述べている。しかし、空間的孤立は急速にグローバル化していく世界において、ほとんど意味をなさないことを我々は学びつつある。ベトナム戦争中にある政治家が、「爆撃で北を石器時代に戻してやれ」と息巻いたものだが、確かにアメリカにはそれをやる軍事力があつた。アメリカにできなかったことは、数千万人のベトナム人の思想を変えろということであつた。つい最近のイラクでは軍事侵攻が急速かつ効果的に進んでおり、これが戦争に勝利したという未熟な結論を導いているようである。しかし、本当の戦争はイラクの人心からみれば、依然としてまだ先の話であり、それは国家の中心部を荒廃させ、結論のみえぬ代償の大きい造反的な状況を強いる。アメリカとその同盟国には装備と規律とがある。しかし、少数派の数が増大する中で（その大半はスンニ派住民）、彼らの疎外感を打ち消すことはできなかった。この地域のことを知り、言語を話し、イ

スラム教に認識を示し、生活リズムを理解し、感情の深さを知悉するアメリカ人はほとんどいない。イラクでの戦役がこのまま継続するのに加え、さらに他の危機も出現することになるだろう。いずれ長期的に最も顕在化してくるのは、来るべき中国との競争である。しかし、今日の中国についてアメリカの一般大衆は、40年前の東南アジアについて彼らが（あるいは、その指導者が）知っていたのと比べて、どれほどのことを知っているというのだろうか。

もしも可能な方法があるのなら、「エリート」大学に地理学科を復活させるだけでなく、大学の新旧に関係なくすべての地理学科に地域研究を復活させたいものである。そのためにはもう一度、現地体験を積んだ、外国語を使える、現地とつながりをもった研究者の集団が増大することが肝要であり、彼らが政府及び情報部局、さらに、他の国家機関の職員になって欲しいと思う。彼らによる努力は、高空兵器の配備や衛星画像、GIS調査と少なくとも同じくらい重要である。地理学は大衆のイメージとは異なり、教化するというだけでなく楽しみの多い分野でもある。しかし、この章の後に続く内容はまた深刻である。相当に深刻である。

〈訳 注〉

*この翻訳は、Harm de Blij, *Why Geography Matters -Three Challenges Facing America: Climate Change, The Rise of China, and Global Terrorism*, Oxford University Press, New York, 2005. の序文及び第1章分を訳出したものである。著者はミシガン州立大学の地理学担当教授であり、ナショナル・ジオグラフィック・ソサエティの終身名誉会員でもある。7年間ABCテレビの「Good Morning America」で編成作業に当たり、同番組にも登場していたことから、地理学者としては（むしろ珍しく）全米で一般に名前を知られている。

後続章でこれからもたびたび指摘されていくように、アメリカでは地理（学）に対する関心はは

なはだ低いといわざるをえない。上文で「むしろ珍しく」と書いたのも決して皮肉ではない。著者が終身名誉会員を務める、ナショナル・ジオグラフィック・ソサエティによる各国の若者を対象とした「国当て調査」では、アメリカは例年大抵最下位という不名誉な状況にある。06年の調査でも18～24歳のアメリカ人の6割が、イラクの位置を正しく示せず、「外国語を上手に話す能力は必要だ」と回答した者はわずか14%にすぎなかったとされる（日本経済新聞夕刊 2007年2月26日）。また、パスポート所持率の低さ（10%台）もこうした現実を暗黙に裏付けているといえる。国際観光という観点からみると、アメリカは世界に冠たるインバウンド大国であり、アウトバウンドもトップクラスである。しかしながら、パスポート所持率の低さや世界地理の認識不足を前提とした場合、この国際観光との大きなギャップは一体どう説明すべきなのか。実に興味深いテーマではある。様々な見方が可能であろうが、ここではそれを説くことが目的ではないから立ち入らない。むしろ後続章でそうしたカギがいくつも出てくるので、この問題に関してはそちらに譲ることとするが、訳者が本書を選出した理由の一つがこの部分にもある（もちろん、それだけではないが）ことを指摘しておきたい。

本書が書かれた背景はこのように上記のような、アメリカ人の基本的な世界認識に関わる理由からである。よって、内容面で多分に同国人に対する啓蒙的な性格がみられる。また、サブタイトルにあるように、三つの項目をアメリカが直面する最重要課題としているが、それらをすべて地理学的に分析しているのが本書の大きな特徴である。特に、主要三課題を気候変化と中国の台頭、国際テロと規定しているのは実に興味深い。実際のところ、こうした包括的な把握をする地理学文献は実に少なく、さらにこれが現実世界との接点を強く意識して描かれているケースはいっそう稀である。自然地理学と人文地理学を通常そうするように区分せず、このように統合的に捉えつつ全体として一個の著作にまとめあげた功績は大きい、というべきだろう。

以後、バラエティに富むこの著作を、何回かに分割して訳出していくこととしたい。なお、図表も含めると相当な分量になり、スペースの都合もあるので、今回もこの後も図表類は一切省いていることを承知おき願いたい。また、参考文献も念のため、原文に忠実に略式なカタチで文末に記載しておいたが、これも詳細はスペースの関係上割愛せざるをえなかった。参考文献の詳細を参照したい場合には、上記原書の巻末を参照願いたい。

Translation;

Harm de Blij, Why Geography Matters –Three Challenges Facing America: Climate Change, The Rise of China, and Global Terrorism

Translated by Naito Yoshiaki